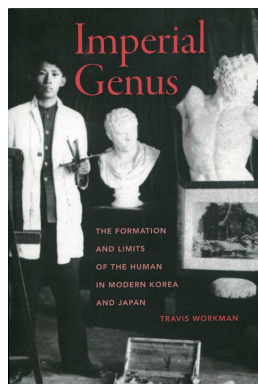


トラヴィス・ワークマン

『帝国類——日本と韓国における近代的主体の形成とその限界』

Travis Workman, *Imperial Genus: The Formation and Limits of the Human in Modern Korea and Japan*. Oakland: University of California Press, 2016.

キム  
哲



本書でトラヴィス・ワークマンは、帝国日本と植民地朝鮮における民族的・国民的主体が、どのような哲学的な基盤の上に形成されたのかを考察している。とても膨大で、また緻密に織りなされているこの考察の全貌を捉えるためには、まず韓国の学界における植民地研究の現況を簡単にでも探ってみる必要がある。

政治経済的収奪および支配の主体としての帝国と、その対象としての被植民地という観点、そしてそこから派生する二項対立、たとえば、民族／反民族、親日／反日、抵抗／協力のような平面的な二分法が根本的な挑戦に直面し、瓦解しはじめたのは、韓国学界の場合、およそこの二十年前後のことである。ミシェル・フーコーの諸著作と、いわゆるポストコロニアリズムの圧倒的な

影響を受けているこれらの新しい研究は、大まかにいえば、帝国日本の植民地支配下において朝鮮の人びとはどのように近代的民族・国民主体になっていったのか、という問題の解明に尽力しているといえよう。その結果、とても多様で、かつ論争的なテーマ、とりわけ近代性そのものに対する問いをはじめ、被植民者たちを近代国民国家の主体として鑄造しようとした植民地の規律装置や制度に関する分析、ジェンダー研究、近代的風俗と秩序をとり扱う日常史研究、戦時期の総動員体制下で行われた抵抗の可能性についての新しい解釈など、枚挙にいとまがないほどの多くの主題とイシューが、一九一〇〜四五五年の植民地期をめぐって展開されるようになった。

ただし一方で、研究の範囲や主題が拡張・分化すると同時に、結論づけにくい難問が生じたのも事実である。植民地研究は、一般的には当該期の政治社会的な変化にしたがつてその対象と主題を定めてきたといえる。たとえば、一九〇〇〜一〇年代の初期朝鮮新文学に関する研究が、主に大正日本の教養主義に影響された啓蒙主義知識人たちの活動を検討するならば、帝国日本の統治方針がいわゆる文化政治に転換した一九二〇年代に関する研究は、民族主義運動とマルクス主義運動の間における差異と葛藤に焦点をあわせている。他方、一九三〇年代以後の戦時期になると、内鮮一体論および大東亜共栄圏をめぐる帝国と植民地の交錯する思想的争闘の分析に主眼がおかれる。このような流れが登場したのは自然なことでもあつて、先述したように、私たちは多彩で豊富な研究目録を得ることもできるようになった。

問題は、これらの研究が有する分散的傾向にある。いくつかの重要な主題、なかんずく民族主義、マルクス主義、モダニズム、帝國的国民主義に対する興味深い個別の研究はとも多いが、これらを総括的に鳥瞰したり、結びつけたりする研究はほとんど見当たらないといつても過言ではない。仮に一九一〇年代の大正デモクラシーと、四〇年代における総力戦体制時期の国民主義言説を同一の地平に位置づけて論じようとしても、両者の距離があまりにもかけ離れていることもあり、そうした試み自体が行われづ

らいのが実状である。プロレタリア文学と超現実主義文学を比較し、それとなく両者の優劣を論ずる研究はありうるだろうが、それらを同様の理論的フレームに入れて分析するのはもちろん、そもそも両者が同じ世界観や哲学を共有していると想定することすら、ほとんど不可能に近くなつているといわなければならない。

トラヴィス・ワークマンの作業がもつ獨創性は、まさにこの地点から発揮される。かれは一九一〇〜四五年までの——そして評者の考えでは、その連続としての現在までの——日本と韓国における近代的主体形成をめぐる数多くの議論を、人類学的な意味における「類的存在」(Genus-Being)ととりわけ「帝国類」(Imperial Genus)の形成という観点から眺める。著者の説明によれば、新カント主義の道徳哲学と文化主義は、帝国日本と植民地朝鮮を貫く主体形成の基本的原理である。二十世紀初頭の日本と朝鮮において「文化」は個人・民族・世界を統合する原理の座を占め、地域と世界、帝国と植民地、特殊と普遍を媒介する機能を含んでいるとみなされた。同時に、人類(Genus homo)がそれぞれもつている特殊性や差異は消え去り、世界を一つに統合する普遍的実践形式としての「類的存在」の概念が、哲学、文学、社会科学の中心的な理念となつた。この「類的存在」は、啓蒙主義文学においては「自律的道徳性」をもつヒューマニズムの人間、モダニズム芸術においては「審美的人間」、プロレタリア芸術においては「生産労働

の主体」、帝國的国民主義の立場においては「国民的主体性」を内蔵する存在になるという。要するに、表面的には極端に対立するようにみえる様々な理念と思想は、新カント主義の文化主義哲学を背景としつつ、あらゆる差異を隠蔽し、ヒューマニズムの普遍性を目指すといった、目的論的な発展論に適合する人間主体を作りあげていたが、それがまさに「類的存在」あるいは「帝国類」であったという。

こうした主張を立証するため、きわめて膨大な資料が用いられていて、また対象とする時期も広いので、この書評でそのすべてをとりあげて論ずることはできない。本書を通して私たちは、二十世紀以来、帝国日本と植民地朝鮮を貫いてきた近代的主体形成における強力な原理の一つを、改めて理解することができるだろう。すなわち、帝国／植民地、普遍／特殊、個別／全体、地域性／世界性、民族主義／階級主義、リアリズム／モダニズム、国民主義／世界主義など、既往の対立的観点が、実は真の差異と起源を隠蔽する虚構にすぎないという点だ。それらの対立は虚構にすぎない、というのではなく、その対立を「類的存在としての普遍性」の概念をもって隠蔽する近代的主体形成の企画こそが虚構であり、暴力であるというのである。この虚構的・暴力的企画の実践においては、文化主義や民族主義、階級主義や帝國的国民主義も全部同一の地平に立つことになる。

もちろん、著者はすべての思想と実践が、ひたすら「帝国類」の企画に包摂されていたとは思っていない。ここでもまた著者の獨創性が目につく。著者は、圧倒的な統合原理としての「人間的普遍性」の企画に逆らう例外的存在を指摘する。すなわち、一九二〇年代のプロレタリア作家中西伊之助、満州流浪移民の悲惨な姿を描いた小説家崔暑海<sup>チエソ</sup>、都市労働者の生を女性主義の観点から描写した姜敬愛<sup>カンキョウエ</sup>、『蟹工船』の作家小林多喜二<sup>コノエタカニ</sup>、在日朝鮮人のハイブリッドなアイデンティティにとり組んだ金史良<sup>キムソリヤン</sup>。そして三〇年代の超現実主義詩人李箱<sup>イサン</sup>が、そのような例外的存在として述べられる。著者が文化主義的企画に逆らう存在としてかれらを取りあげるのは、かれらが当該期の支配的言説、とりわけ歴史的時間を同質化する時空間（chronotope）に基づいて普遍的な「類的存在」となることを強調する目的論・理想主義的なヒューマニズムを拒否し、矛盾を孕む周辺の主体や不連続的でハイブリッドな主体、否、主体になりうる機会すら奪われているサバルタン、あるいはいわゆる「卑体」（*abject*）たちを、異なるクロノトープに沿って描きだしているからである。管見のかぎり、今までの朝鮮文学研究において、姜敬愛や崔暑海を李箱と同一の文脈に位置づけて比較したものは、本書以外には見当たらない。こうした比較は獨創的であり、また説得力をも有しているが、それは二十世紀の日本と韓国における近代的主体を「帝国類」の形成として説明

する著者の系譜学的方法論が、きわめて創見に富んでいるからだと思われる。

ただし評者は、ヒューマニズムの普遍性の近代的企画から逸れている事例を、上記の作家たちだけに限って論じる著者の見解に対しては、若干の疑問を感じる。というのも、かれらのすべての作品がそうであったとはいきれないからである。同様に、かれらと対照をなしている哲学者や文人たちが、つねに道徳主義や国民主義的主体の立場をとっていたわけでもない。一人の作家、ないしは一つの作品のなかには、無数の矛盾と亀裂が含まれている。かれらは、そして私たちは、つねにすでに自分自身に対しても例外的で複数的な存在、矛盾した不連続性を孕む存在にならざるをえないのである。私たちは、著者のスケッチを辿りつつ、このように己のなかに存在する無数の他者が現れうるクロノトープでの、その主体たちを発見・再現することにとり組んでいかなければならないだろう。

(翻訳：沈熙燦<sup>シムヒチヤン</sup> 立命館大学客員研究員)